
五分で読める奇妙な話

葛城

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

五分で読める奇妙な話

【Nコード】

N4149I

【作者名】

葛城

【あらすじ】

友達もいない、彼女だってもちろんいない俺の元に、茶封筒が届いたのは、すこし肌寒くなった秋の頃だった。

手紙（前書き）

基本的に、5分で読み終わるように制作しています。

なので、あらすじはほとんど書かないと思うので、ご了承ください。

（あらすじ書いたら、話が全バレしちゃうから）

手紙

俺のところに手紙が届いたのは、半袖の服でいるには肌寒い秋の頃だった。

当時俺は親元から離れて一人暮らしをしていた。築ウン十年、トイレは和式で、風呂も部屋もキッチンも全部狭い、団地のマンションで生活していた。

それなりの大学に入れたからか、親も家賃分とは別にいくらか色を付けて仕送りしてくれた。

友達も居ないし彼女だつてもちろん居ない俺にとって、贅沢しなければ、バイトとかしなくても食べていける生活できた。おかげで十分に満喫した一人暮らしを送っていたと思う。

そんなときだったかな。玄関ポストに一通の手紙が入っていたのは。

初めはそれがなんなのか分からなかった。手紙って言ったって、レター用紙を入れるような便箋なんかじゃなくて、封筒に入っていたんだ。しかも、一番安い薄茶色の封筒に、だ。

おまけに封筒の表裏には何のあて先も送り主の名前も書かれていない。はつきり言って、最初は悪戯かと思った。

いつもだったら、そんな封筒なんて開けもせず捨てるんだけど、そんなときの俺は暇を持て余したせいかな、その封筒を開けちゃったんだ。

中に入っていたのは、一枚の紙切れ。そこには。

『貴方の事が大好きです。始めて見たときから、貴方のことが忘れられません』

って、丸っこい文字で書かれていただけだった。

思わず俺は舞い上がった。だってそうだろ。女の子（って決まったわけじゃないけど、男が書いたとは思えない可愛い文字だった）女の子との接点なんて、中学のとき以来。

みつともなくガツツポーズまでしちまったくらいだから、そのときの俺はよっぽど嬉しかったんだろうな。

でも、その喜びも、頭の片隅に悪戯、って言葉が出た途端、萎れちまった。

だってそうだろ。あて先も名前も書かないラブレターがあるか？
少なくとも、俺は知らない。

でもまあ、一瞬だとはいえ、喜ばせてもらったのは事実。そんなときの俺は、何を血迷ったのか、ゴミ箱の中に入っていたチラシの裏に。

『俺も好きです』

って一言書いたんだ。それで、それを元の封筒にねじ込んで、玄関ポストに挟んで置いたんだ。そうやってたら、相手も手紙を取れる
と思っ
てね。

その後、その日はもう酒飲んで寝た。なんていうか、精神的に疲れたというか、なんと
いうか、とにかく飲まなければやってられない気分だった。

翌日。大学に向かうとき確認したら、封筒は消えていた。

それから何日経ったか、よく覚えていない。でも、だいたい4日かそこら経っていたと思う。

いつものように大学からまっすぐ帰ってきて、いつものように家の鍵を開けようとしたとき、俺はポストに挟まった封筒を見つけたんだ。

俺はその封筒を見た瞬間、あの悪戯を思い出したよ。そのときには俺もだいぶ冷静になっていて、あの封筒は完全に悪戯って思っていたんだ。

俺を騙せていると思ったんだろうな。だから、また性懲りも無く送ってきた。送ってきた誰かのことを考えると、自然と頬がにやけてきてしまう。

だってそうだろう？ 俺に気づかれているとも思わず、送ってくるんだぜ。正直言って、封筒の中身よりもそっちの方が気になったくらいだ。

本当、今にして思えば、捨ててしまえば良かったって思っているよ。

それで、そのときの俺は、部屋に入ってから、なんの躊躇いもなく封筒を開けたんだ。そしたら、なんて書いてあったと思う？

『嬉しい、私たち、両思いだね』

って書いてあったんだ。ここまでは、ああ、前と同じかって思ったんだ。でも、今度は前と違った。封筒には、紙が2枚入っていた。『私は今、遠くに居るの。あなたのこと、見ていることしか出来ないけど、私のこと、忘れないでね』

そう書いてあったんだ。今にして思えば、その文章自体、変なんだよな。遠くにいるのに、見ていることしか出来ないって、変だろ？ どうやって見ることが出来るんだよ。

でも、そのときの俺は深く考えずに、文章の下に一言二言返事を書き込んで、またポストに挟んで置いたんだ。

その夜。変な夢を見た。今でもはつきり思い出せる、奇妙な夢だ。真っ暗な世界……っていうのか、よく分からないけど、とにかく手元も見えないくらい真っ暗な闇。夢の中の俺は、そこにいたんだ。

不思議と、怖いとかは感じなかった。ただ、誰かに見られているような、変な感じだけはした。なんて言えばいいのか、とにかく、奇妙だった。

翌日起きた俺は、この夢のことに何の疑問も抱くことなく、欠伸して大学に向かったんだけどな。

手紙が届いたのは、それからきっかり三日後だった。ちょうどサ

ザエさんが放映される日だったから、今でも覚えている。（今でもサザエさんは好きです）

3度目にもなると、封筒を見た瞬間、ああ来たか、程度にしか感じなくなっていた。正直、もうどうでも良くなってきたんだろ
うな。

もうほとんど慣性で封筒を開けて、中の手紙を取り出したんだ。紙は2枚入っていて、わざわざ一緒に折りたたまずに別々に分けて入れていた。

『やっぱり貴方は可愛い。貴方と手を繋ぎたい。もう、私の手は貴方へ』

って書かれていた。なんていうか、背筋に怖気が走った。

もしかして俺、基地外を相手にしているんじゃないか、って今更な考えに思い至ったんだ。（まだ、基地外の方がいくらかマシだったのかもしれないが）

そう思えると、なんともないと思っていた手紙も怖くなってくる。開けたとき確認したけど、封筒に入っていたもう一枚は、もう見ようとは思わなかった。

怖くなった俺は、その日部屋の戸締りをしっかりと確認してから寝た。怖かったけど、ホテルに泊まる金はないし、泊めてくれる友達はいなかったから。

とりあえず護身用にとっておいたバット（プラスチック……無いよりはマシ）を抱えることと、電気を点けばなしにするぐらいしか、出来なかった。

その夜、また変な夢を見た。（忘れたいけど、今でも忘れられない）

前と同じように、真っ暗闇。視線だけは感じる。

でも、それだけじゃなかった。視線の先、なんでか知らないけど、ほわほわ……っていうのかな。ロウソクよりも頼りないくらい淡い光が二つ、現れたんだ。

ジッと目を凝らして見る。その光が大きく、自分に近づいて生き

ていると分かった瞬間、俺はその光の正体が分かった。

手だ。それも、手首から先だけの、右手と左手だ。その両手が、ふわふわと漂いながら、俺に近づいてきていたんだ。もう自分でも訳が分からなかった。ただ口をパクパクして、手が近づいてくるのを見ていることしか出来なかった。そして、その手が俺の目の前まで来た瞬間、俺は布団を跳ね飛ばすように起き上がった。

心臓が煩かった。体中から冷や汗を流している俺は、枕元に置いた時計を見ようと思ったけど、辺りは真っ暗。仕方なく起き上がった電気を点けて、時間を見ると、時間的には深夜だった。

……ふと、残った手紙が気になった。止めとけて、頭の中で思ったけど、俺は何かに突き動かされるように置いておいた封筒の身から、残った紙を取り出した。

瞬間、俺は後先考えずに窓から飛び降りると、無我夢中でコンビニに走った。なんで窓とか、今にして思うけど、そのとき目に最初に入ったのが窓だったからだろう。

（住んでいた部屋が2階だったから良かったけど、下手したら大怪我だった）

とにかく、一人は嫌だったから、明るい場所を目指して走った。

その後、俺は近くのコンビニの前で一晩時間を潰した後（金を全部部屋に置いてきてしまったから、中で時間を潰すにはどうも……）、スーツ着た人や学生がちらほら俺の横を通ってコンビニに入っていくのを見て、ようやく一息付けたんだ。

それまでの俺は、かなり酷かったと思う。今ではよく思い出せないけど、一晩中頭を抱えて蹲っていたと思う。（よく通報されなかったな、俺）

そうやって落ち着いてきて、俺は初めて自分が封筒から取り出し

ていた紙を握り締めていたことに気づいたんだ。一晩中握り締めていたせいで、手が硬直しちゃって指を開くことが出来なかったことが印象に残っている。

でも、四苦八苦しながらどうにかしわくちやになった紙を取り出した俺は、読もうかどうか迷った。

ぶっちゃけ、もう関わり合いたくなかった。今すぐ紙をゴミ箱に投げ捨てたかったけど、好奇心ってやつなのかな。汗を吸ったせいで脆くなった紙を、丁寧に広げたんだ。

すぐに後悔した。だってそこには。

『やったね、ついに貴方に会える。私、玄関の前で待っているわ』
……それ見た瞬間、俺は知っている交番に駆け込んで、親に電話してもらって実家に帰った。荷物とか、そんなのは全部処分した。あの部屋に置かれているものは全部捨てた。大学は、親を説得する思いから、一生懸命勉強して、いい会社に推薦させてもらった。

紙は、いつのまにか無くなっていた。いまだに、どこで無くしたのか分からない。

今でも、あの手紙がなんだったのか、分からない。ただ、あの薄茶色の、茶封筒を見るたび、身構えてしまうのはもう、どうしようもないのかもしれない。

手紙（後書き）

今までとは違って、グロテスクな描写はないと思う。
たまにはこんな話があってもいいかな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4149i/>

五分で読める奇妙な話

2010年10月9日04時45分発行